

# 小学校体育における「運動遊び」のあり方の一考察

三浦 万歩（宮城教育大学）

## 1. 目的と研究方法

本研究は、小学校低学年の体育における運動遊びの特徴や性質、子どもの運動発達の現代的課題に合わせた運動遊びのあり方とその授業の手立てを考察することを目的とした。背景として、幼児期の運動発達には保育者による一方的な指導ではなく内発的動機づけを重視した遊びが効果的であることや、近年の子どもの発達の遅れによって、運動発達が不十分なまま小学校に入学してくることが指摘されていることから、本研究では「内発的動機づけの保障」「自由で柔軟な指導計画や指導形態」に着目して、低学年の運動遊びについて検討することとした。

研究方法は、まず、学習指導要領の変遷を振り返ることで、運動遊びがどのように位置づけられてきたかを考察した。その後、1977年～1997年の基本の運動の典型実践を分析することで、今後の運動遊びのあり方とその授業の手立てについて考察した。

## 2. 学習指導要領における運動遊び

学習指導要領の変遷を、①生活体育の時代（1945年～1957年）、②体力づくり体育の時代（1958年～1976年）、③楽しい体育の時代（1977年～1997年）、④新学力観の時代（1998年～2007年）、⑤指導内容の体系化の時代（2008年～現在）に区切り、その時代にどのような指導が行われ、運動遊びがどう位置づけられていたかを明らかにした。また、②楽しい体育の時代には、「運動遊び」が定義され、基本の運動とゲームを通して未分化・未組織の遊びの要素を重視した授業が行われていたことから、分析対象をこの時代の実践にすることとした。

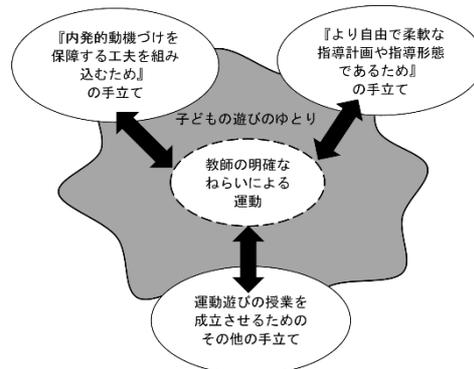
## 3. 実践の分析

対象とした13本の実践を、(1) 題材名（扱う領域）、(2) 教師のねらい、(3) めあての提示形態、(4) 活動内容・進め方、(5) 教師の指導の形態（どこまで子どもに任せているか）、(6) 教師の内発的動機づけへの意識に関する記述、(7) 子どもの様子、

(8) 評価をどのように行っているか、(9) 授業の終わり方（どうまとめているか）、(10) 授業時数、(11) 実践における特記事項の11の観点から分析を行い、それぞれに示した。

## 4. 考察と結論

実践の分析から、[1] 内発的動機づけを保障する工夫を組み込むための手立てと、[2] より自由で柔軟な指導計画や指導形態であるための手立て、[3] 運動遊びの授業を成立させるためのその他の手立ての3つの観点で考察をした。[1]は、①課題の設定、②子どもの主体性を重視した声掛け、③称賛・認める働きかけ、④成功体験の保障、⑤めあての示し方、⑥発展性が考えられた。[2]は、①授業の展開の柔軟性、②授業の終わり方、③環境づくり、④授業数の確保が考えられた。[3]は、①教師によるグループ編成、②教師が範囲を決める、③感想を書かせる、の手立てが考えられた。以上の13の手立てについて、実践の記述と照らし合わせながら、それぞれ具体的に示した。これらの手立てを行うことで、教師の明確なねらいがある授業の形を保ちながらも、子どもの遊びのゆとりの幅が広がり、より子どもの運動コントロール能力の発達が促されると考えられる。



## 5. 主な参考文献

- ・白旗和也（2018）新学習指導要領は低学年の体育に何を求めているのか、大修館書店、体育科教育、67巻9月号：pp22-25